

2018年6月 九州一周 動物捕獲の旅

(特別展「共に生きたもの ～ムシと動物の考古学～」のための資料借用集荷)

梅雨も終盤の長雨の中、トラックに乗って、1泊2日の九州一周動物捕獲の旅に出た。
(博物館語訳：梅雨の長雨の悪条件の中、美術品専用車に乗って、特別展に向けた資料借用集荷のため、1泊2日の日程で九州内を回った。)

早朝5時に宮崎市内を出発し、大分県立埋蔵文化財センターへ。ここでは、鳥舟の装飾付器台(須恵器)や、鹿の線刻絵画付き弥生土器、犬や猪の頭蓋骨を借用した。鳥舟器台は、2艘の舟と鳥が、棒状の把手の上に差込式で取り付けてあるのに加え、小壺が胴体に8ヶ所も貼り付いている。

この凹凸だらけの須恵器は、梱包するのに非常に手間がかかる。薄葉紙で細部を保護しつつ、綿布団で全体を何重にも覆い、ダンボール箱に収めた。

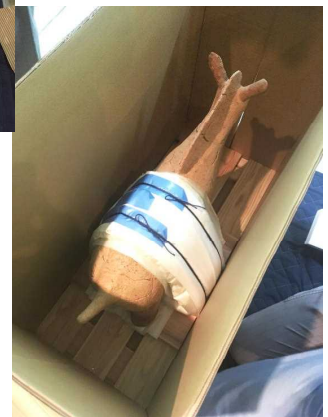


次に向かうは、福岡県田川市、石炭・歴史博物館。ここでは馬1頭を捕獲予定。比較的小振りの馬ではあるが、股間には牡馬のシンボルが…。足から胴体にかけては丈夫な作りだが、耳、タテガミ、尾など華奢で注意を要する。

ここでは、あえて全体を包まず、丈夫な胴体部分をスノコの台に固定してダンボール箱に収める方法を採用した。顔から首、尾は露出したまま。ダンボール箱内で馬を固定したスノコが跳ねないように発泡スチロールの支柱を入れて固定した。馬を1頭ゲットした。



次に向かうは九州国立博物館。しかし、捕獲作業は翌日にして、ここではトラックを停泊させる。数日に渡る狩り(集荷)の場合、途中でキャンプ(宿泊)をしなければならない。その際、どこにでもトラックを停留する訳にはいかない。貴重な獲物(文化財)を積んでいるのだ。信頼できる車庫を持つ博物館にお願いする。今回は九州国立博物館。広い停泊場と管理システムは安心できる。博物館同士の連携と協力である。



翌日は、那珂川町出土の馬を、九国博の収蔵庫内で捕獲する。前日の馬と同様に小振りであるが、揃えたタテガミや馬具が特徴的だ。胴体部分はズングリとしている。ここでも前日同様の方法を採用した。首元の石膏に認められた小さな剥がれ部分だけを薄葉紙で押さえ、胴体とスノコ台を綿布団とサラシ、麻紐で固定した。2頭目の馬をゲットした。



最後に向かうは福岡県八女市、岩戸山歴史文化交流館。筑紫君磐井の墓として有名な岩戸山古墳に隣接し、2年前に開館したばかりの施設だ。岩戸山古墳出土の石人石馬をはじめとする貴重な文化財がズラリと展示されている。ここでも馬を狙う。

一目見て驚いた。デカイ。これまでの2頭とは違う。それに脚が長い。館長のお話では、4脚ともに復元で長さの根拠は希薄だそうで、一部研究者からは脚の長さにも異論もあるそうである。

馬体の大きさに比例して、重量もかなりのものがある。これまでのようにダンボール箱の檻では捕獲不能である。事前に用意していた木製枠（檻）を用いた。大の男3人がかりで台に乗せ、少しずつスライドさせて木枠の中へ。中段に設けた栈木で馬体を挟み、鞍や尻繫の飾りに注意しながら、馬体と栈木をサラシで固定した。前後にも横木を渡し、

輸送中のズレ対策とした。しかし、大きな頭から首にかけての揺れが気になった。息苦しさを我慢してもらい、サラシで吊って上部の枠木に固定した。3頭目の馬をゲットした。



前日朝5時に出発してから37時間。無事に3頭の馬をはじめとする多くの動物たちを捕獲（借用）し、西都原へ戻った。

文化財を輸送するためには梱包が必要である。資料の形状や大きさ、特徴を理解し、適切な保護と補強を行いながら梱包する。全体を包めば良い訳ではない。過度な梱包はかえって危険な場合もある。資料のどこが丈夫で、どこが脆弱なのか、それを見抜く力が学芸員には求められる。



(東 憲章)

無事に西都原の収蔵庫に納められた動物たち